

魔法の力

奥出雲町立横田中学校 三年 石倉麻由

「人は自分のために行動するよりも誰かのために行動するときのほうがより多くの力を発揮することができる」そんな言葉をどこかで見たことがあった。そんなのはマンガやアニメの主人公だけだと思っていたし、何より総人口約七十八億人もいるこの世界で、そこまで思いを入れ込めるほど大切な人は、到底私には見つけれられる気がしなかった。

私は姉が苦手だ。なぜなら私と姉は好きなもの、嫌いなもの、性格、様々なことに対して正反対だったからだ。私達は反りが合わずよく喧嘩をしている。そんな私達を止めてくれるのはいつも母だった。母親一人で仕事、家事、子供二人を育てるのはどんなに大変なことか。それでも母は私達と向き合って愛情深く育ててくれた。中学二年生の秋、この頃の私はイマイチ勉強に身が入らないでいた。だから私は母に怒られてばかりいた。

「だってしょうがないじゃん。部活動や委員会の引き継ぎで忙しいし、まだ二年生だし、勉強をそんなに頑張らなくても大丈夫。」

心のなかでそんな言い訳を唱えながら。勉強机に座っても、違うことが目に入り、なかなか集中できずにダラダラと毎日を過ごしていた。

ある時、リビングに行ってふと目にしたのは、パソコンに向かっている母の姿だった。画面には高校や大学の奨学金のサイト、机の周辺にはいろいろな高校、大学のパンフレットが散乱していた。それを目にした私は驚いた。てっきり仕事をしているのだと私は思っていた。母が今までより仕事を頑張っていることは知っていた。けどまだ姉も私も高校・中学二年生。それなのに、そこまで頑張らなくてもいいのに。私は心のなかで、母のことをバカにした。

私はなんとなく見ているのが苦しくなって自分の部屋に戻った。ダラダラしている私とは対照的な姉。私たち娘のために頑張っている母を見て罪悪感がわいてきた。この日、私の心にはモヤモヤとしたものが残った。

ある日、私はこっそり母のスケジュール帳を見た。そのスケジュール帳には様々な色で書かれた文字と付箋が溢れんばかりに並んでいた。そこには仕事のことはもちろん、オープンスクールの日程の予想、私達の誕生日のことも細やかに記されていた。それを見た私はなんだか心の中が熱くなってきた。母親一人で仕事、家事、子供二人、しかもふたりとも受験生ときて、この両立はどんなに大変なことか。私達のために母は一所懸命に頑張ってくれている。それなのに、私は自分勝手にだらけている。家族みんなが頑張っているのに、私だけ何もしていない…。私もその恩を返すべきではないか。そう考え私は母にさり気なくこう聞いた。

「なにか欲しいものない？」

母の目が近かったこともあるが、なによりいつも頑張っている母を労りたかったのだ。母は微笑みながらこう言った。

「母の日とか考えんで良いけん。あんたは自分のことだけ考えなさい」

「自分のことだけ」考えて、好きなだけだらけていた私。そんな私に「自分のことだけ考えなさい」と言ってくれる母。私は母にこのように考えた訳を話した。すると母はこう言ってくれた。

「私はあんたたち二人の笑顔を思い出すと力が溢れてくるんだよ。だけんあんたが笑顔でいてくれたらそれだけで幸せだけん」

この言葉を聞いたとき、スーッと心の中の霧が晴れてきたように感じた。何か物を渡すことで伝えられる気持ちは限られている。そんな単純なことではなかったのだ。母が求めていることは、贈り物ではない。私たちの幸せが、母の喜びになるのだ。私の頑張りが人のしかも大切な母の力になるなんて、思いもよらなかった。私は初めて自分の存在の価値に気づかされた。

その日から私は、「母のために頑張りたい。家族のために勉強をもっと頑張りたい。」と思うようになった。私は今までよりさらに勉強に熱が入るようになった。誰かのために頑張るパワーはすごいと感じた。私の中で、何かに火が付いた。誰かのために頑張るなんて考えたこともなかった私だったのに、母への思いが力になる。それは現実世界でも手に入る魔法の力だった。

魔法の力を手にしてから、今まで伸び悩んでいた成績に変化があった。徐々に成果が表れるようになってきたのだ。そのことを母に自慢げに話している時、偶然通りかかった姉にも褒めてもらった。この時のうれしかった気持ちは今でも覚えている。私を応援し認めてくれる人は、こんなに近くにもう一人いた。

自分のためだけでなく、周りの誰かの幸せを思って行動する時、その思いはつながっていく。魔法の力のように幸せの輪が広がる。母を笑顔にしたい。姉とも仲良くしていきたい。だって私達は家族なのだから。